

# 蜘蛛流大工棟梁横田氏の懸魚絵様について

## — 横田家大工文書の研究(7) —

Consideration on the Design Style of “Gegyo” made by the Yokota Family, the Master Builders of Kumo School

白井 裕泰\*  
Hiroyasu Shirai

### 1. はじめに

横田氏は、東北地方において蜘蛛流と呼ばれる大工集団を形成し、江戸後期から明治期にかけて活発な建築生産を行った大工棟梁である。

本研究は、「蜘蛛流大工棟梁横田氏の絵様について」<sup>注1)</sup>の一連の分析に引き続き行うものであり、蜘蛛流大工棟梁横田氏が建築した作品にみられる懸魚絵様の変遷を体系的に把握することを目的としている。また横田家大工文書の中で懸魚絵様図を基本資料として取り上げ、横田氏の建築作品における懸魚絵様と比較することによって、名称不明の絵様図がどの建築作品に用いられたかを特定できることを期待している。さらには近世に公刊された木割書における

懸魚絵様と比較することによって、横田氏の懸魚絵様の特色を明らかにする。

### 2. 木割書における懸魚絵様

横田氏の絵様を分析するにあたって、ここでは懸魚絵様を取り上げることにするが、江戸時代の代表的な木割書として須原屋茂兵衛蔵版の大工雛形書があり、その中で絵様を取り扱われているものとして表1のようなものがある<sup>注2)</sup>。ただし「大工絵様雑工雛形」は岐阜屋（正文堂）清七が版元であるが、参考資料としてここにあげておく。

ところで麓和善氏他は「木版本彫物書系絵様雛形の内容的特質」<sup>注3)</sup>において懸魚絵様の変遷過程について次のように指摘している。

表1 近世における主な大工雛形書

No.	絵様雛形書名	著者名	刊行年	備考
01	大匠雛形 彫物絵本	鈴木重春	正徳4年(1714)	全5冊の内2冊
02	匠家絵様集	官匠廣丹農父	宝暦9年(1759)	全2冊
03	新撰雛形 五 絵様	小暮甚七	宝暦10年(1760)	全5冊の内1冊
04	大和絵様集	立川小兵衛	宝暦13年(1763)	全4冊
05	彫工雛形	二柳先生	文政10年(1827)	全1冊
06	当世いろは絵様集	奴長兵衛	天保5年(1834)	全2冊
07	大工絵様雑工雛形	落合大賀範国	嘉永3年(1850)	全2冊

\*住居学科

正徳四年(1714)から享保二年(1717)の間に記されたと考えられる『大匠雛形 彫物絵本』では、比較的斬新な意匠の鯖尾懸魚も見えるが、その他の懸魚本体は、ほとんど猪の目懸魚・蕪懸魚・三花懸魚などの古典的なものである。しかし、鯖は線形のみならず天象・植物などをモチーフとしたものが記されており、まず鯖の部分を装飾化することから始まったといえる。その後、宝暦九年刊の『新撰大工雛形 五』になると、懸魚本体が複雑な線形や渦の組み合わせによる新奇なものが多くなり、また全体が植物と化したものもあらわれる。以後、具象模様化がさらに進み、文政十年刊の『彫工雛形』からは、左右非対称のものも増えてくる。

すなわち近世における懸魚の変遷を次の3期に分けて、その特徴を整理している。第1期(『大匠雛形彫物絵本』(正徳4・1714年)～)は「懸魚本体は、ほとんど猪の目懸魚・蕪懸魚・三花懸魚などの古典的なものであり、鯖が具象模様」。第2期(『新撰雛形五』(宝暦10・1760年)～)は「懸魚本体が複雑化し、全体が植物化」。第3期(『彫工雛形』(文政10・1827年)～)は「全体が具象模様で左右非対称」。

以上の指摘を踏まえて、各大工雛形書における懸魚をみることにする。懸魚絵様を詳細に検討した結果、その特徴を簡単にまとめたのが表2である。

## 2-1 懸魚絵様の分類

木割書における懸魚絵様を分類するには、まず懸魚が取り付けられる位置と懸魚の形態と意匠の主題に分けて考えなければならない。

懸魚は取り付けられる位置によって、挿み懸魚、降り(身舎桁隠し)懸魚、降り(向桁桁隠し)懸魚、唐破風挿み懸魚(兎の毛通し)と呼ばれる。

懸魚の意匠をみると、懸魚と鯖の関係に注目すると、次の3つのタイプに分けることができる。A:懸魚のみ。B:懸魚と鯖が分離してい

る。C:懸魚と鯖が一体化している。

また懸魚と鯖の意匠をそれぞれみると、懸魚には一般的な猪の目懸魚、蕪懸魚、三ツ花懸魚、梅鉢懸魚、切懸魚の他に絵様線形(以下絵様と記す)懸魚、二ツ花懸魚、二重懸魚、絵様切懸魚、丸懸魚がある。鯖の意匠には、抽象的な絵様、植物系の葉、菊花・葉、牡丹花・葉、渦若葉、天象系の渦、渦・波、渦・波頭、雲、雲水などがみられる。

さらに懸魚と鯖が一体化しているものには、鯖部分が絵様になっている意匠と全体が具象的な意匠とがある。具象的な意匠として、植物系の渦若葉、菊花・葉、動物系の鳳凰、龍、天象系の渦・波頭、雲水、天象系と動物系が複合した白兎・雲水などがみられる。

## 2-2 懸魚絵様の変遷

懸魚絵様の変遷を挿み懸魚、唐破風挿み懸魚、鯖に分けてみることにする。

1)挿み懸魚:懸魚単体型または懸魚鯖分離型から懸魚鯖一体型へ変遷

『大匠雛形』(1714)では猪の目懸魚、蕪懸魚、三ツ花懸魚、梅鉢懸魚といった一般的な懸魚の他に、懸魚鯖一体型絵様懸魚、二ツ花懸魚、二重懸魚、絵様切懸魚のような意匠のものがみられる。

『匠家絵様集』(1759)では、絵様懸魚のみがある。

『新撰雛形』(1760)では、『大匠雛形』と同様に、猪の目懸魚、蕪懸魚、三ツ花懸魚、梅鉢懸魚、切懸魚といった一般的な懸魚の他には、絵様懸魚、懸魚鯖一体型二重懸魚がみられる。

『大和絵様集』(1763)では、蕪懸魚、三ツ花懸魚の一般的なものの他には、二重懸魚、「渦」懸魚(基本的には猪の目懸魚で、本体の両肩に渦がある)、「丸」懸魚(懸魚の先端が唇のようになっている)など新奇な意匠がみられる。

『彫工雛形』(1827)では、懸魚鯖一体型龍懸魚しかみられない。

表 2 - 1 木割書における懸魚絵様

No.	絵様雛形書名	懸魚位置	懸魚様式	鱗位置	鱗様式	備考	
01	大匠雛形 彫物絵本 上 下			拌み	菊花・葉		
02				拌み	菊葉		
03				拌み	渦・波		
04				拌み	牡丹花・葉		
05				拌み	菊花・葉		
06				拌み	雲水		
07				拌み	絵様		
08			降り	二ツ花	降り	菊花・葉	懸魚鱗分離型
09			拌み	絵様	拌み	絵様	懸魚鱗一体型
10			唐破風拌み	猪の目	拌み	絵様	懸魚鱗一体型
11			拌み	猪の目	拌み	雲	懸魚鱗分離型
12			拌み	絵様切			懸魚単体型
13			拌み	梅鉢			懸魚単体型
14			拌み	蕪	拌み	絵様	懸魚鱗分離型
15			拌み	蕪, 猪の目	拌み	雲水	懸魚鱗分離型
16			拌み	三ツ花	拌み	葉	懸魚鱗分離型
17			拌み	二重	拌み	葉	懸魚鱗分離型
18	匠家絵様集	唐破風拌み	蕪	拌み	絵様	懸魚鱗一体型	
19				拌み	絵様		
20		起破風拌み	絵様	拌み	絵様	懸魚一体離型	
21		唐破風		拌み	渦		
22	新撰雛形 五 絵様	拌み	蕪			懸魚単体型	
23				拌み	絵様		
24		拌み	絵様			懸魚単体型	
25		拌み	猪の目			懸魚単体型	
26		拌み	三ツ花			懸魚単体型	
27		拌み	梅鉢, 切			懸魚単体型	
28					拌み	葉, 絵様	
29		拌み	猪の目			懸魚単体型	
30					拌み	牡丹花・葉	
31		拌み	二重		拌み	渦	懸魚鱗一体型
32					拌み	渦	
33		唐破風		拌み	菊花・葉		
34	大和絵様集 三	拌み	二重			懸魚単体型	
35		拌み	二重			懸魚単体型	
36		拌み	三ツ花			懸魚単体型	
37		拌み	絵様切			懸魚単体型	
38		拌み	渦猪の目, 蕪			懸魚単体型	
39		拌み	丸			懸魚単体型	
40					拌み	葉	
41					拌み	葉	

表 2-2 木割書における懸魚絵様

No.	絵様雛形書名	懸魚位置	懸魚様式	鱗位置	鱗様式	備考
42				拌み	雲水	
43				拌み	絵様(渦)	
44				拌み	渦	
45				拌み	雲	
46				拌み	雲行	
47		唐破風拌み	絵様	拌み	絵様	懸魚鱗一体型
48	彫工雛形	唐破風拌み	鳳凰			懸魚鱗一体型
49		拌み	龍			懸魚鱗一体型
50		唐破風拌み	鳳凰			懸魚鱗一体型
51	当世いろは絵様集上	唐破風拌み	猪の目	拌み	絵様	懸魚鱗一体型
52		唐破風拌み	渦若草			懸魚鱗一体型
53		降り	猪の目	降り	渦若葉	
54		降り	絵様			
55		拌み	猪の目	拌み	渦	懸魚鱗分離型
56		拌み	二重	拌み	渦若葉	懸魚鱗分離型
57		拌み	渦若草			懸魚鱗一体型
58	当世いろは絵様集下	起破風拌み	渦・波頭			懸魚鱗一体型
59		起破風拌み	猪の目	拌み	渦・波頭	懸魚鱗分離型
60		拌み	渦・波頭			懸魚鱗一体型
61		唐破風拌み	猪の目	拌み	雲	懸魚鱗分離型
62	雑工雛形	拌み	蕪	拌み	菊花・葉 絵様	懸魚鱗分離型
63		拌み	三ツ花	拌み	牡丹花・葉	懸魚鱗分離型
64		拌み	唐花			懸魚単体型
65		拌み	鳳凰			懸魚鱗一体型
66		唐破風拌み	飛龍			懸魚鱗一体型
67		拌み	板彫(渦若葉・雲水)			懸魚鱗一体型
68		拌み	白兎(雲水)			懸魚鱗一体型
69		降り	雲水			
70		拌み	二重	拌み	渦, 渦若葉	懸魚鱗分離型
71		起破風拌み	立浪(渦・波頭)			懸魚鱗一体型
72		拌み	枝菊(菊花・葉)			懸魚鱗一体型
73		唐破風拌み	雲水			懸魚鱗一体型

『当世いろは絵様集』(1834)では、猪の目懸魚、二重懸魚の他に、新たに懸魚鱗一体型渦若葉懸魚、渦・波頭懸魚などの意匠がみられる。

『雑工雛形』(1850)では、蕪懸魚、三ツ花懸魚、二重懸魚の他に、「唐花」懸魚、「鳳凰」懸魚、「板彫」懸魚(渦若葉・雲水)、「白兎」

懸魚(白兎・雲水)、「立浪」懸魚(渦・波頭)、「枝菊」懸魚(菊花・葉)などの新奇な意匠がみられる。蕪懸魚、三ツ花懸魚、唐花懸魚以外はすべて懸魚鱗一体型の懸魚である。

このように『大匠雛形』において懸魚単体型の意匠はほぼ出尽くし、新奇のものとしては、『大和絵様集』の「渦」懸魚、「丸」懸魚、『彫

大匠雛形

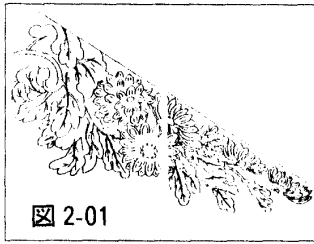


図 2-01

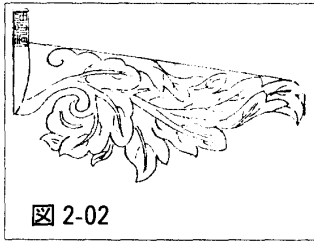


図 2-02

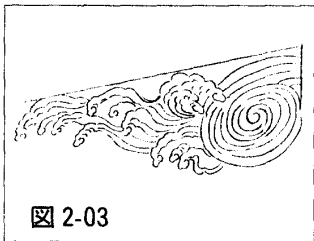


図 2-03

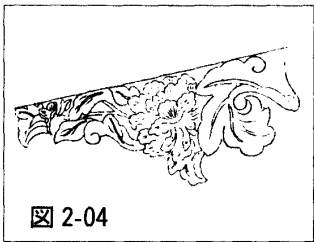


図 2-04

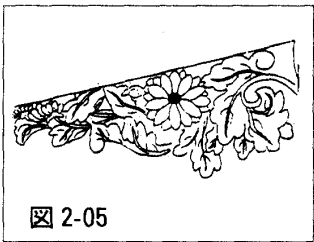


図 2-05

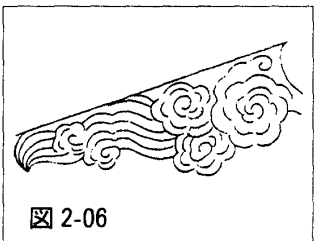


図 2-06

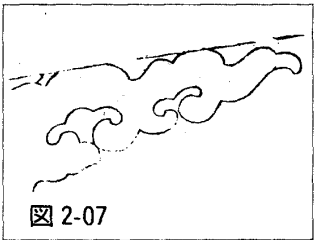


図 2-07

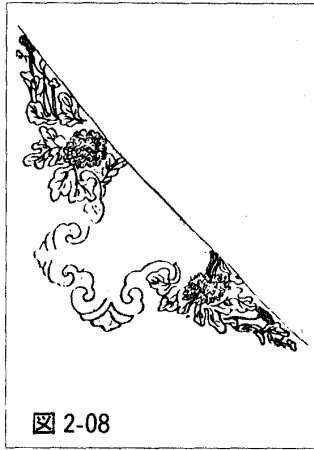


図 2-08

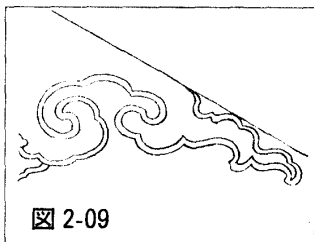


図 2-09

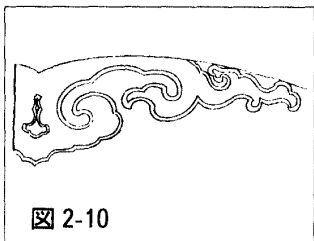


図 2-10

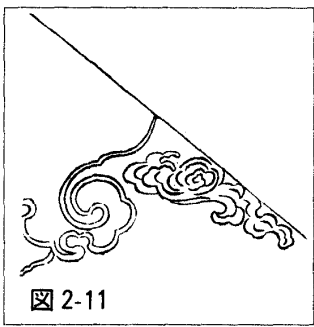


図 2-11

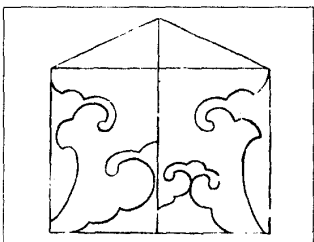


図 2-12

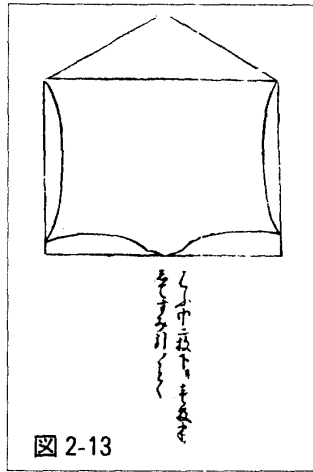


図 2-13

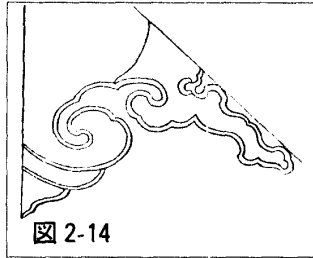


図 2-14

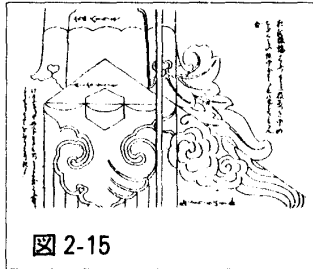


図 2-15

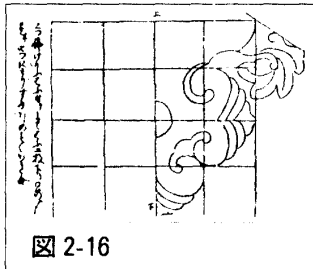


図 2-16

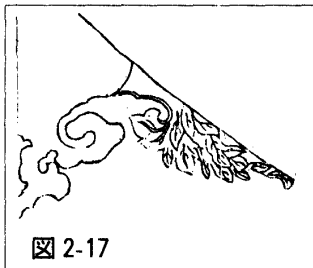


図 2-17

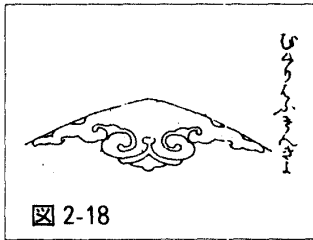


図 2-18



図 2-19

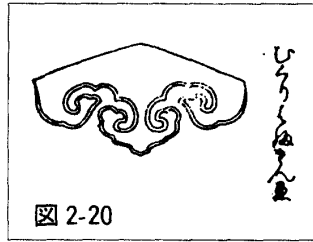


図 2-20

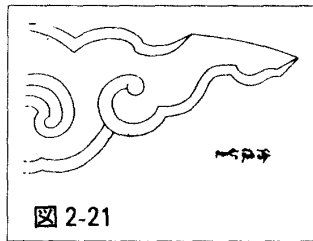


図 2-21

新撰雛形

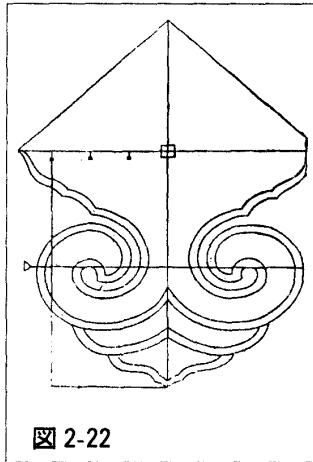


図 2-22

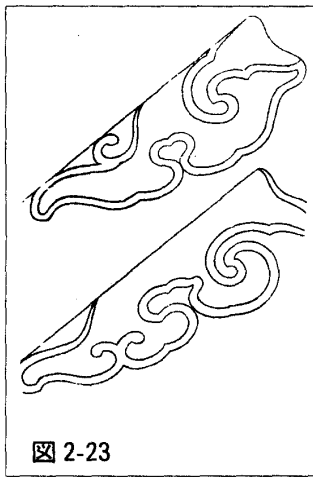


図 2-23

匠家絵様集

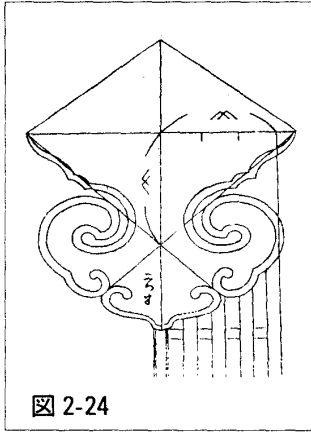


図 2-24



図 2-28

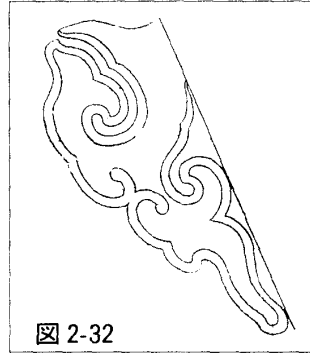


図 2-32

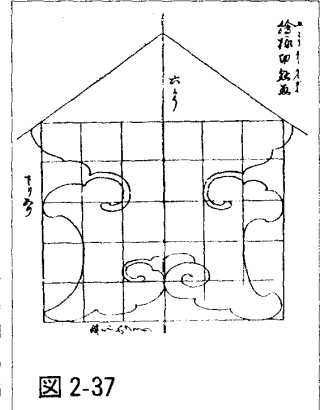


図 2-37

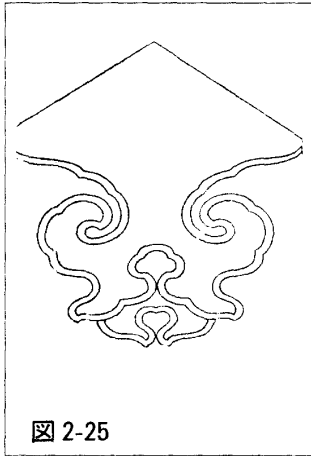


図 2-25

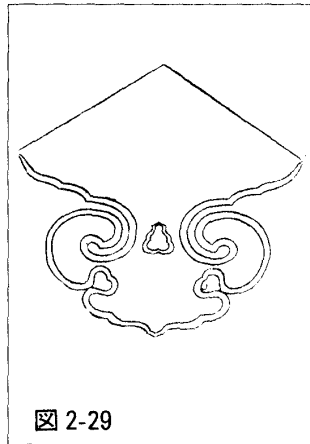


図 2-29

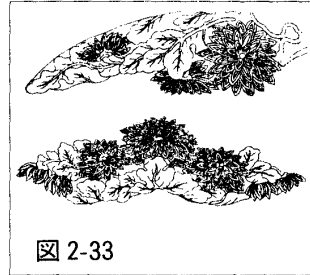


図 2-33

大和絵様集

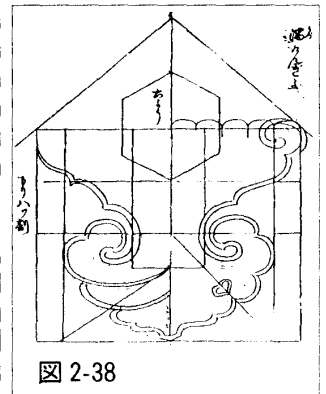


図 2-38

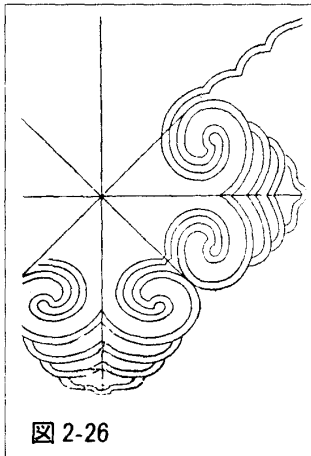


図 2-26

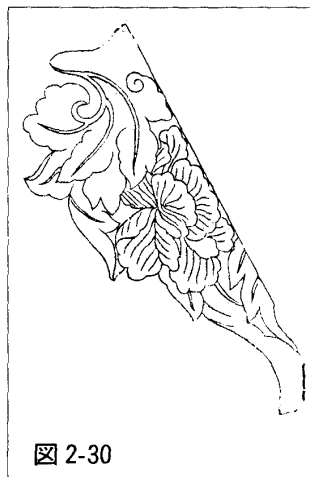


図 2-30

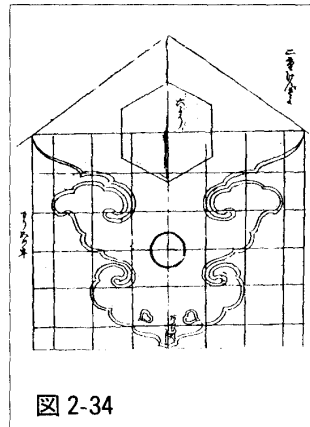


図 2-34

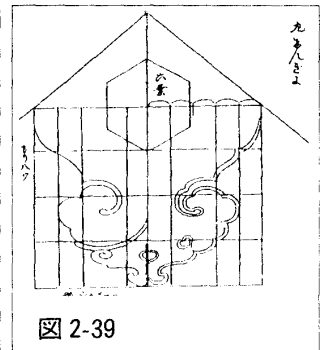


図 2-39

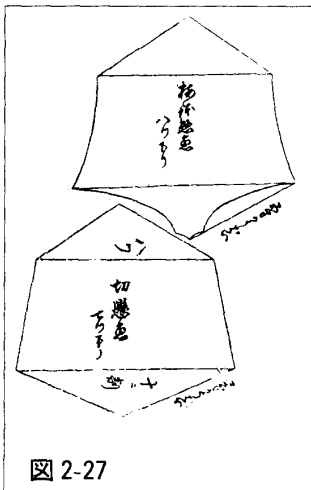


図 2-27

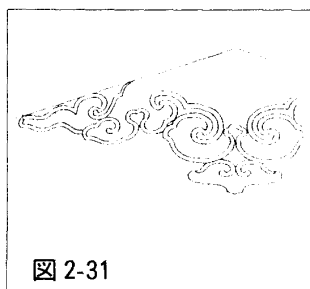


図 2-31

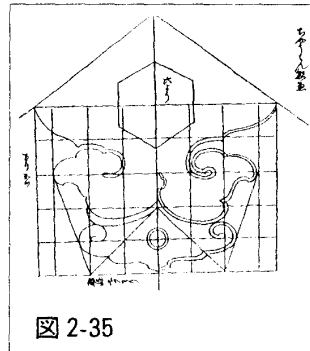


図 2-35

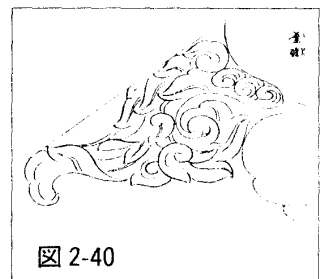


図 2-40

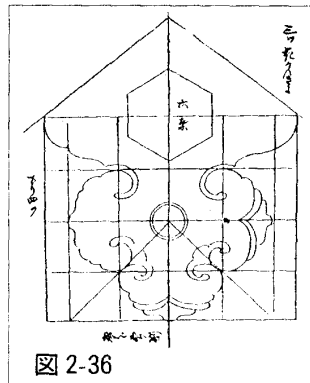


図 2-36

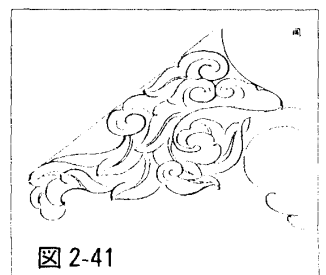


図 2-41

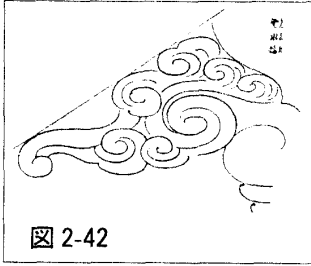


図 2-42

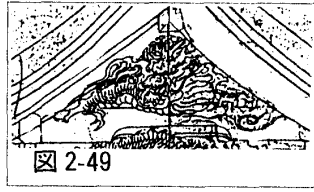


図 2-49

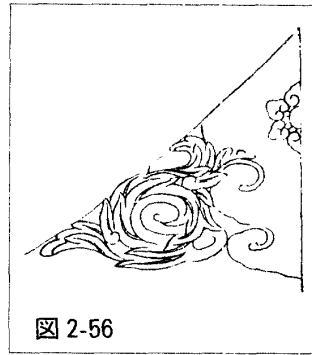


図 2-56

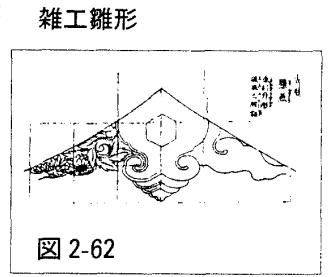


図 2-62

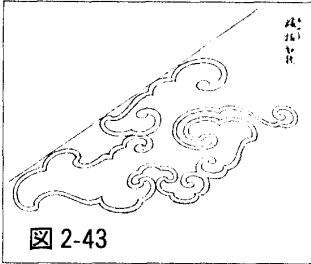


図 2-43

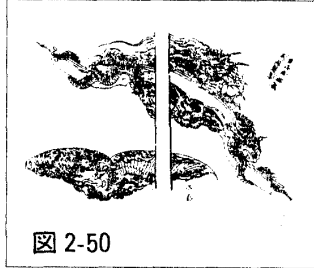


図 2-50

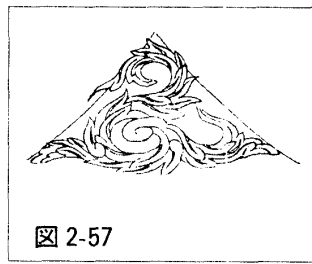


図 2-57

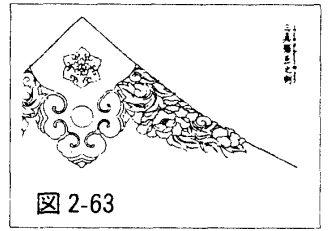


図 2-63

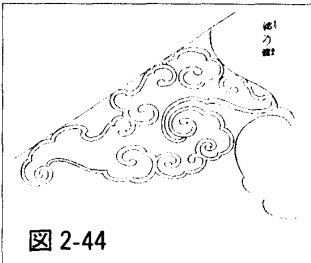


図 2-44

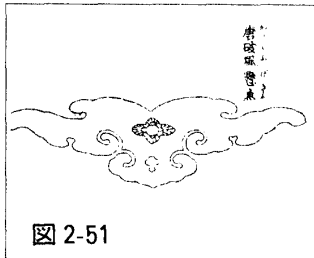


図 2-51

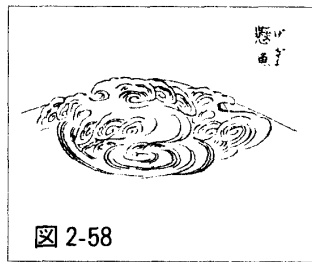


図 2-58

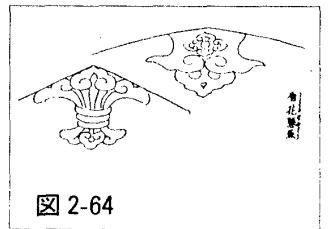


図 2-64

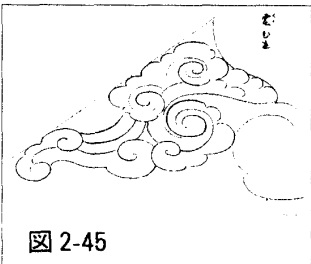


図 2-45

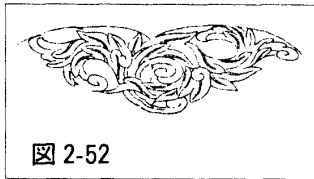


図 2-52



図 2-59

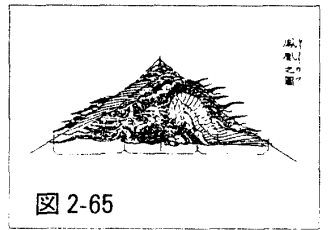


図 2-65

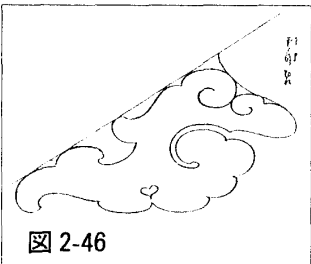


図 2-46

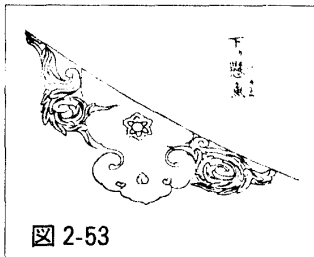


図 2-53

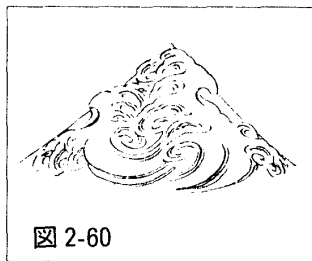


図 2-60

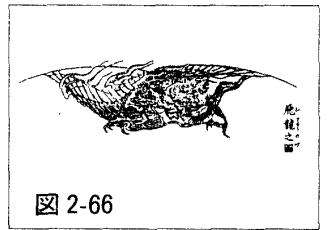


図 2-66

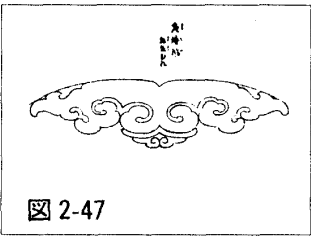


図 2-47

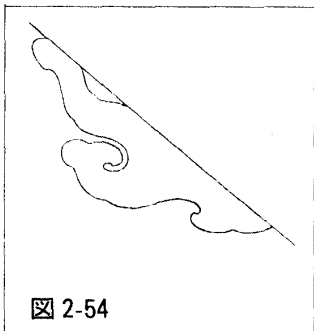


図 2-54

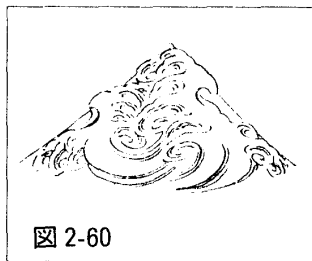


図 2-60

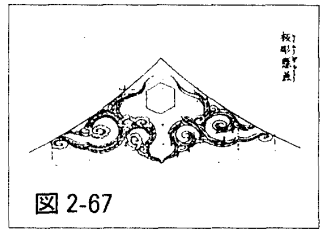


図 2-67

彫工雛形



図 2-48

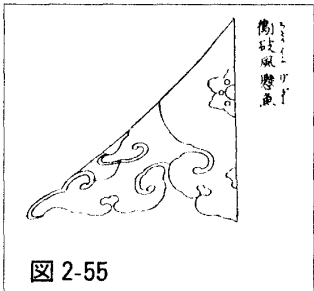


図 2-55

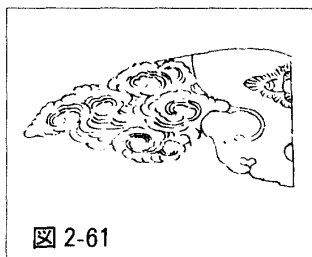


図 2-61

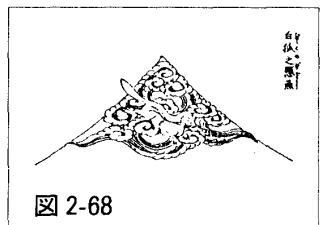
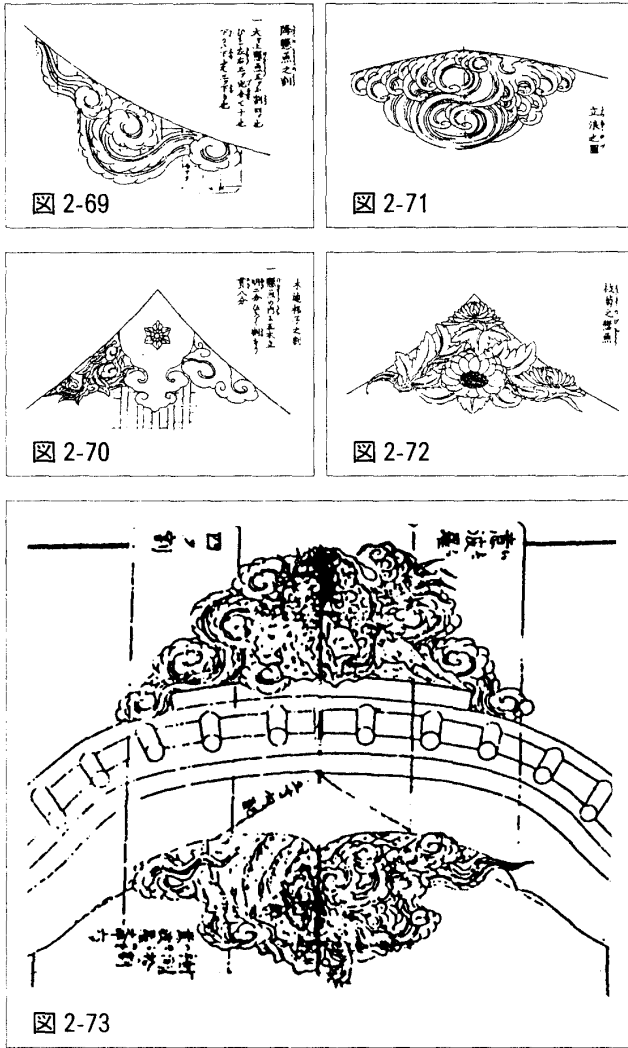


図 2-68

当世いろは絵様集

雑工雛形



工雛型』の龍懸魚、『当世いろは絵様集』の渦若葉懸魚、渦・波頭懸魚、『雑工雛形』の「唐花」懸魚、「板彫」懸魚、「白兔」懸魚、「立浪」懸魚、「枝菊」懸魚などがでてくる。特に『雑工雛形』の意匠の新奇さは群を抜いていて、幕末期の意匠の多様性を見ることができる。

2) 唐破風挿み懸魚：懸魚鰭一体型が一般的

『大匠雛形』(1714)では、猪の目懸魚のみ。  
 『匠家絵様集』(1759)では、蕪懸魚のみ。  
 『新撰雛形』(1760)では、唐破風挿み懸魚はみられない。  
 『大和絵様集』(1763)では、絵様懸魚のみ。  
 『彫工雛形』(1827)では、鳳凰懸魚のみ。  
 『当世いろは絵様集』(1834)では、猪の目懸魚、渦若葉懸魚、猪の目懸魚雲鰭付がある。  
 『雑工雛形』(1850)では、「飛龍」懸魚、雲水懸魚がある。  
 唐破風挿み懸魚は、猪の目懸魚、蕪懸魚、絵

様懸魚などの一般的なものから『彫工雛形』以後鳳凰懸魚、渦若葉懸魚、飛龍懸魚、雲水懸魚など、動物系・植物系・天象系の左右非対称形のもの主流になる。

3) 鰭：植物系と天象系の意匠が一般的

『大匠雛形』(1714)では、絵様の抽象的な意匠と菊花・葉、菊葉、牡丹花・葉、渦・波、雲水などの植物系・天象系の具象的な意匠がみられる。

『匠家絵様集』(1759)では、絵様の意匠のみ。

『新撰雛形』(1760)では、絵様の意匠と、植物系として葉、牡丹花・葉、天象系として渦などの意匠がある。

『大和絵様集』(1763)では、植物系の意匠として葉、天象系の意匠として雲水、雲、渦、「雲行」(渦絵様)がある。

『彫工雛形』(1827)では、鰭はみられない。

『当世いろは絵様集』(1834)では、絵様の意匠と、植物系の渦若葉、天象系の渦、渦・波頭、雲などの意匠がみられる。

『雑工雛形』(1850)では、植物系の菊花・葉、牡丹花・葉、渦若葉、天象系の渦などの意匠がみられる。

このように『大匠雛形』で鰭の意匠は出尽くし、わずかに『当世いろは絵様集』以後の渦若葉鰭の意匠が新しいものである。鰭にあまり変化がみられないのは『彫工雛形』以降懸魚鰭一体型が主流になることと関係している。

3. 横田氏の建築作品にみる懸魚絵様

横田氏が手掛けた建築作品にみられる懸魚絵様について詳細にみると、以下ようになる。

① 菅谷神社本殿 (寛保2・1742) : 図3-01・02 参照

挿み懸魚は蕪懸魚であり、葉鰭が付いている。降り懸魚は全体が菊の花と葉でデザインされた懸魚になっている。

② 普賢寺山門 (寛延2・1749) : 図3-03・04 参照

挿み懸魚は蕪懸魚であり、葉鰭が付き、菅谷神社の挿み懸魚に酷似している。降り懸魚



は渦文のある絵様懸魚である。

- ③菅船神社本殿（文化14・1817）：図 03-05～07 参照

拝み懸魚は蕪懸魚であり、菊の花と葉をデザインした鰭が付いていて、これまでの懸魚の様式を踏襲している。降り懸魚は猪の目懸魚が全体に葉化されたものと全体が菊の花と葉でデザインされたものとがみられる。

- ④蛭沢稻荷神社本殿（文政2・1819）：図 3-08～10 参照

拝み懸魚は蕪懸魚であり、雲水鰭が付いている。降り懸魚は全体が渦と波頭でデザインされたものと牡丹の花と葉でデザインされたものとがみられる。デザインにこれまでにない新奇さが窺われる。

- ⑤龍穩院本堂（天保2・1831）：図 3-11 参照

唐破風拝み懸魚、いわゆる兎の毛通しは、横田棟梁の作品の中でこの例が始めてであり、鳳凰と雲のデザインでまとめられている。破風の両茨間を埋める大きさを持ち、のびのびとして華麗な作品である。

- ⑥子鋏倉神社本殿（嘉永4・1851）：図 3-12 参照

拝み懸魚は蕪懸魚のみとなっている。

- ⑦満福寺鐘楼（万延2・1861）：図 3-13 参照

拝み懸魚は蕪懸魚であり、渦若葉鰭が付いている。

- ⑧駒形神社本殿（明治6・1873）：図 3-14 参照

拝み懸魚は懸魚鰭一体型の渦若葉懸魚であり、大きな透かしが二つ入っている。

- ⑨鹿島神社拝殿（明治15・1882）：図 3-15 参照

拝み懸魚は懸魚鰭一体型の渦若葉懸魚であり、左右非対称形となっている。

- ⑩剛叟寺本堂（明治22・1889）：図 3-16 参照

唐破風拝み懸魚は渦と波頭でデザインされた懸魚である。

- ⑪宇佐八幡神社拝殿（明治23・1890）：図 3-17 参照

唐破風拝み懸魚は鳳凰でデザインされた懸魚である。龍穩院の鳳凰と比べて尾羽根が曲がりくねり、彫りが繊細になっている。

- ⑫熊倉神社拝殿（明治25・1892）：図 3-18 参照

唐破風拝み懸魚は雲水でデザインされ、破風の両茨間を埋めるかなり大きなものになっている。

- ⑬古峰神社拝殿（明治31・1898）：図 3-19 参照

唐破風拝み懸魚は雲龍でデザインされ、熊倉神社拝殿と同様に、破風の両茨間を埋める大きな懸魚である。雲龍の彫りには、曲がりくねった線を多用しながらも一方で鋭さが感じられる。

- ⑭郎山神社本殿（明治37・1904）：図 3-20 参照

拝み懸魚は懸魚鰭一体型で、本体下部は渦絵様で上部から鰭部分にかけて渦若葉化し、大きな透かしが二つ入っている。駒形神社本殿の拝み懸魚に似ている。



図 3-01 菅谷神社本殿拝み・降り懸魚



図 3-02 菅谷神社本殿降り懸魚



図 3-03 普賢寺山門拝み懸魚



図 3-08 蛭沢稻荷神社本殿拝み懸魚



図 3-04 普賢寺山門降り懸魚

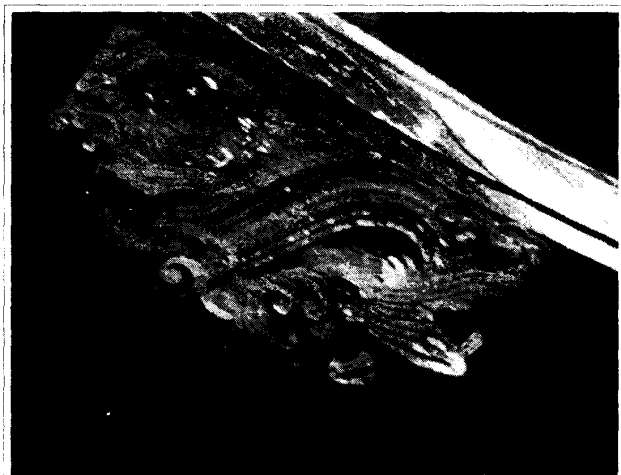


図 3-09 蛭沢稻荷神社本殿降り懸魚

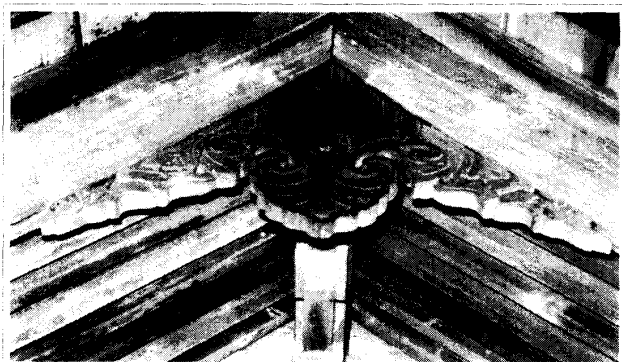


図 3-05 菅船神社本殿拝み懸魚

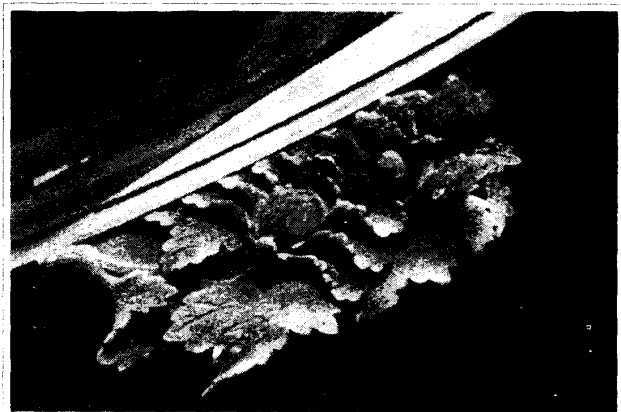


図 3-10 蛭沢稻荷神社本殿降り懸魚



図 3-06 菅船神社本殿降り懸魚

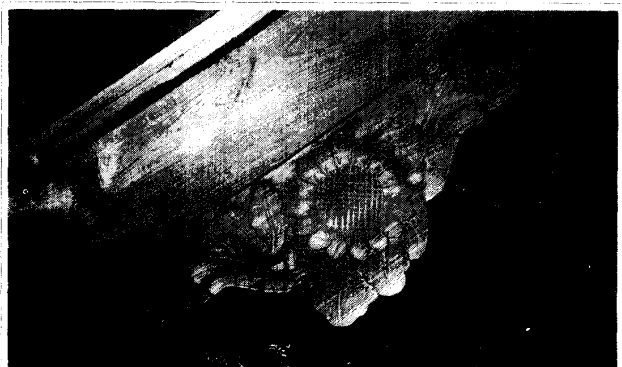


図 3-07 菅船神社本殿降り懸魚



図 3-11 龍穂院本堂唐破風拝み懸魚



図 3-12 子楸倉神社本殿拝み懸魚



図 3-13 満福寺鐘楼拝み懸魚



図 3-14 駒形神社本殿拝み懸魚

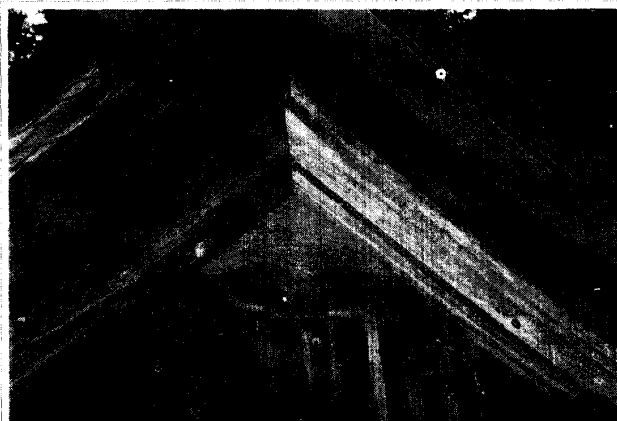


図 3-15 鹿島神社拝殿拝み懸魚



図 3-16 剛叟寺本堂唐破風拝み懸魚



図 3-17 宇佐八幡神社拝殿拝み懸魚

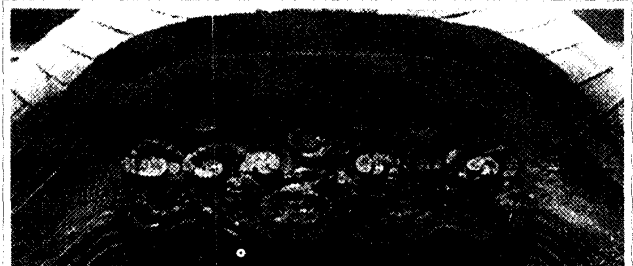


図 3-18 熊倉神社拝殿唐破風拝み懸魚



図 3-19 古峰神社拝殿唐破風拝み懸魚

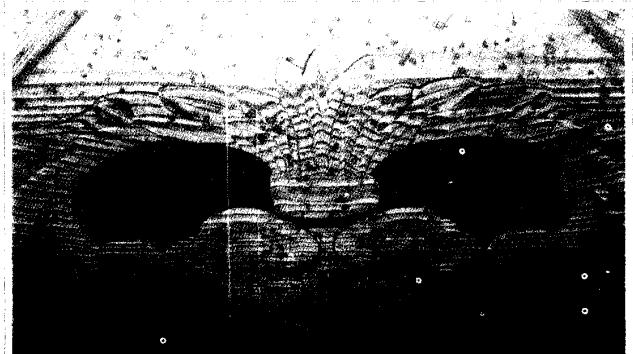


図 3-20 郎山神社本殿拝み懸魚

### 3-1 懸魚絵様の変遷

横田氏が手掛けた建築作品にみられる懸魚絵様の特徴をまとめたものが表3である。

この表を参考にして横田氏の懸魚絵様の変遷を概観すると、以下ようになる。

- 1) 拝み懸魚の本体は、満福寺鐘楼（1861）の懸魚まで猪の目付蕪懸魚が使われている。したがって拝み懸魚の変化は鰭部分にみられる。
- 2) 鰭絵様の変遷は、菅船神社本殿（1817）までは植物系の花または葉によってデザインされ、それ以後蛭沢稻荷神社本殿（1819）の雲水や満福寺鐘楼（1861）の渦若葉などの鰭が現れた。
- 3) 懸魚鰭一体型の懸魚は駒形神社本殿（1882）が始めてであり、明治期の拝み懸魚はすべて一体型である。
- 4) 唐破風拝み懸魚は龍穩院本堂（1831）が初出であるが、明治期には剛叟寺本堂（1889）向

拝を初めとして、宇佐八幡神社・熊倉神社・古峰神社などの拝殿向拝に用いられ、そのデザインは鳳凰・雲水・雲龍のように豪華になり、多様化する。

### 3-2 横田氏の懸魚と木割書における懸魚との比較

横田氏の懸魚絵様と木割書における懸魚絵様を比較してみると、以下のような傾向がみられる。

まず拝み懸魚本体は菅谷神社本殿（1742）から満福寺鐘楼（1861）まで共通した絵様、すなわち猪の目懸魚と蕪懸魚を折衷した様式をもち、横田氏固有の懸魚絵様の特徵を示している。

次に懸魚鰭一体型の懸魚は、唐破風拝み懸魚では一般的であり、龍穩院本堂（1831）の玄関向拝の唐破風拝み懸魚に最初に用いられ、その様式は鳳凰、渦・波頭、雲水、雲龍などがみら

表3 横田氏の建築作品にみる懸魚絵様

No.	建 物 名	建 築 年 代	懸 魚 位 置 / 様 式	鰭 位 置 / 様 式	参 照
01	菅谷神社本殿	寛保2・1742	拝み／蕪	拝み／葉	図2-05
02			降り／菊花・葉		
03	普賢寺山門	寛延2・1749	拝み／蕪	拝み／葉	図2-05
04			降り／渦		
05	菅船神社本殿	文化14・1817	拝み／蕪	拝み／菊花・葉	図2-01
06			降り／菊葉		
07			降り／菊花・葉		
08	蛭沢稻荷神社本殿	文政2・1819	拝み／蕪	拝み／雲水	図2-11
09			降り／渦・波頭		
10			降り／牡丹花・葉		
11	龍穩院本堂	天保2・1831	唐破風拝み／鳳凰・雲		図2-48
12	子楯倉神社本殿	嘉永4・1851	拝み／蕪		
13	満福寺鐘楼	万延2・1861	拝み／蕪	拝み／渦若葉	図2-56
14	駒形神社本殿	明治6・1873	拝み／渦若葉		図2-57
15	鹿島神社拝殿	明治15・1882	拝み／渦若葉		図2-57
16	剛叟寺本堂	明治22・1889	唐破風拝み／渦・波頭		図2-71
17	宇佐八幡神社拝殿	明治23・1890	唐破風拝み／鳳凰		図2-65
			拝み／雲水		
18	熊倉神社拝殿	明治25・1892	唐破風拝み／雲水		図2-73
19	古峰神社拝殿	明治31・1898	唐破風拝み／雲龍		図2-66
20	郎山神社本殿	明治37・1904	拝み／絵様・渦若葉		

れる。一般的な拝み懸魚で一体型のものとしては、駒形神社本殿（1873）のものが最初であり、明治期の拝み懸魚はすべて渦若葉懸魚を用いている。

また横田作品の降り懸魚は蛭沢稻荷神社（1819）以前にしか例が無く、木割書においても例が少なく（図2-08, 図2-53, 図2-54, 図2-69）比較することは困難である。

したがって満福寺鐘楼（1861）以前では鰭の様式の比較、龍穩院本堂（1831）以後では唐破風拝み懸魚と懸魚鰭一体型の拝み懸魚の様式を比較することにする。

横田氏作品の鰭の様式と木割書の鰭を比較すると、菅谷神社本殿（1742）から蛭沢稻荷神社本殿（1819）までの鰭は、『大匠雛形 彫物絵本』（1714）の鰭絵様に類似している。たとえば、菅谷神社本殿（1742）鰭および普賢寺山門（1749）鰭は図2-05に、菅船神社本殿（1817）鰭は図2-01に、蛭沢稻荷神社本殿（1819）鰭は図2-11にそれぞれ類似している。

龍穩院本堂（1831）唐破風拝み懸魚は、彫工雛形（1827）の懸魚（図2-48）に類似し、満福寺鐘楼（1861）鰭および駒形神社本殿（1873）・鹿島神社拝殿（1882）の懸魚鰭一体型の懸魚は、『当世いろは絵様集』（1834）の渦若葉懸魚に類似している。たとえば、満福寺鐘楼（1861）懸魚は図2-56に、駒形神社本殿（1873）・鹿島神社拝殿（1882）懸魚は図2-57にそれぞれ類似している。

剛叟寺本堂（1889）から古峰神社拝殿（1898）までの懸魚は、『雑工雛形』（1850）の懸魚に類似している。たとえば、剛叟寺本堂（1889）の唐破風拝み懸魚は図2-71に、宇佐八幡神社拝殿（1890）の唐破風拝み懸魚は図2-65に、熊倉神社拝殿（1892）の唐破風拝み懸魚は図2-73に、古峰神社拝殿（1898）唐破風拝み懸魚は図2-66にそれぞれ類似している。

郎山神社本殿（1904）拝み懸魚は横田石太郎独自の様式であろう。

このようにみえてくると、横田氏の懸魚絵様は、木割書における懸魚絵様と比べると、龍穩院本

堂を除けばほぼ30年遅れて流行（木割書における懸魚絵様）を追っているように窺われる。

#### 4. 横田家大工文書にみる懸魚絵様

横田家大工文書における懸魚絵様は41点あるが、このうち文書に建物名が記入されていたことから名称が判明しているのは6点に過ぎない。

横田氏の建築作品にみる懸魚絵様と比較検討した上で、大工文書にみる懸魚絵様の変遷を推定し、時代順に並べたものが表4である。

大工文書における懸魚絵様がどの社寺のものであるか不明であるもののうち、横田氏の建築作品にみる懸魚絵様と比較したとき、きわめてよく似ているものをあげれば以下のようなものがある。

図4-02は菅谷神社本殿降り懸魚に、図4-07は普賢寺山門拝み懸魚の鰭に酷似している。図4-09～11は長祿寺懸魚に酷似しているが、この拝み懸魚本体は横田氏の建築作品に共通して用いられたデザインであった。図4-13は菅船神社本殿拝み懸魚の鰭に、図4-17は蛭沢稻荷神社本殿拝み懸魚の鰭に、図4-22は龍穩院本堂向拝唐破風拝み懸魚に、図4-26は満福寺鐘楼拝み懸魚の鰭に、図4-30は鹿島神社本殿拝み懸魚に、図4-31・32は駒形神社拝殿拝み懸魚に、図4-33は剛叟寺本堂唐破風拝み懸魚に、図4-38・39は宇佐八幡神社拝殿向拝唐破風拝み懸魚にそれぞれ酷似している。また図4-24・25の2点は、子鋤倉神社本殿の他の部材（虹梁・木鼻・臺股）の絵様を考慮して、これに取り付けようとした鰭であると推定した。その他、類似例として14点あった。

表4 横田家大工文書にみる懸魚絵様

No.	建物名	判明・類似	懸魚位置	懸魚様式	鰭位置	鰭様式
01	洞国寺	判明	降り	菊花・葉		
02	菅谷神社本殿	酷似	降り	菊花・葉		
03	同上	類似	降り	菊花・葉		
04	同上	類似	降り	菊花・葉		
05	同上	類似	降り	菊花・葉		
06	同上	類似	降り	菊花・葉		
07	普賢寺山門	酷似			拝み	花・葉
08	長祿寺	判明	拝み	蕪		
09	同上	酷似	拝み	蕪		
10	同上	酷似	拝み	蕪		
11	同上	酷似	拝み	蕪		
12	菅船神社本殿	類似	拝み	渦葉, 猪の目	拝み	菊花・葉
13	同上	酷似			拝み	菊花・葉
14	同上	類似			拝み	菊花・葉
15	同上	類似			拝み	菊花・葉
16	蛭沢稻荷神社本殿	判明	拝み	蕪		
17	同上	酷似			拝み	雲
18	同上	類似	拝み	蕪		
19	同上	類似	拝み	蕪		
20	同上	類似	拝み	蕪		
21	同上	類似	拝み	蕪		
22	龍穩院本堂	酷似	唐破風拝み	鳳凰・雲		
23	不明		拝み	蕪	拝み	若葉
24	子鋏倉神社本殿	推定	拝み	蕪	拝み	渦若葉
25	同上	推定	拝み	蕪	拝み	渦若葉
26	満福寺鐘楼	酷似	拝み	蕪	拝み	渦若葉
27	大日寺客殿	判明	拝み	蕪	拝み	雲
28	不明		拝み	牡丹花・葉		
29	不明		拝み	渦若葉		
30	鹿島神社本殿	酷似	拝み	渦若葉		
31	駒形神社拝殿	酷似	拝み	渦若葉		
32	同上	酷似	拝み	渦若葉		
33	剛叟寺本堂	酷似	唐破風拝み	渦・波頭		
34	同上	類似	唐破風拝み	波頭		
35	同上	類似	唐破風拝み	渦・波頭	拝み	菊, 牡丹花葉
36	諏訪神社拝殿	判明	唐破風拝み	鳳凰		
37	宇佐八幡神社拝殿	類似	唐破風拝み	鳳凰		
38	同上	酷似	唐破風拝み	鳳凰		
39	同上	酷似	唐破風拝み	鳳凰		
40	熊倉神社拝殿	判明	唐破風拝み	渦若葉		
41	不明		唐破風拝み	渦・波頭		

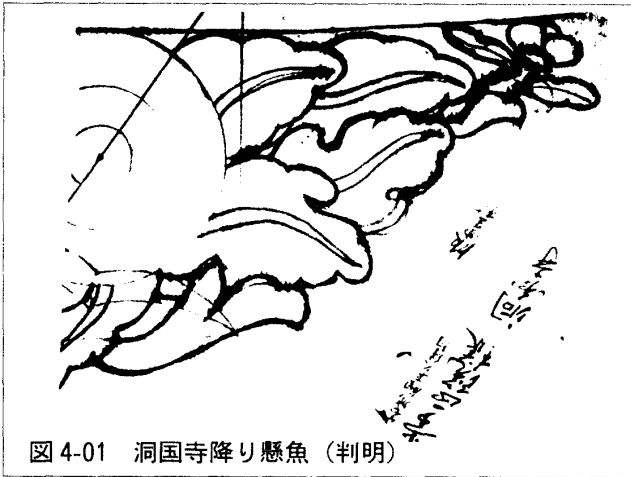


図 4-01 洞国寺降り懸魚 (判明)

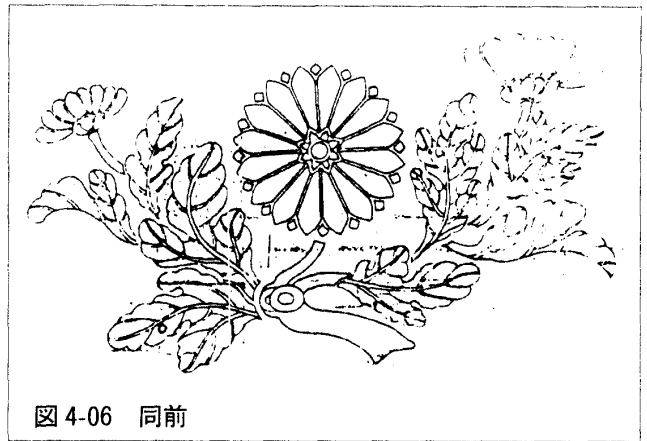


図 4-06 同前

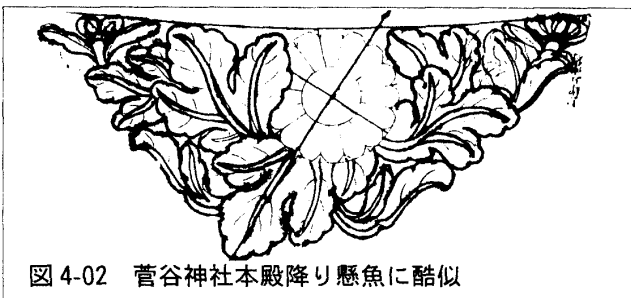


図 4-02 菅谷神社本殿降り懸魚に酷似

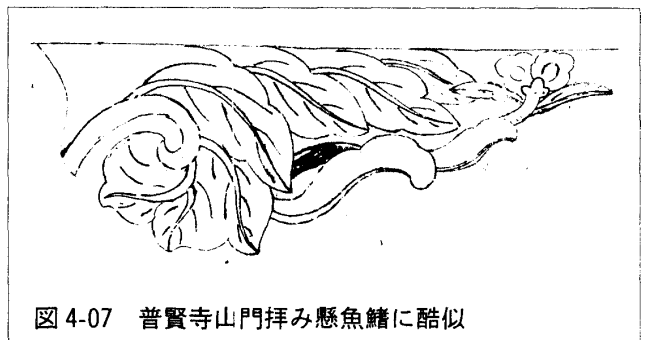


図 4-07 普賢寺山門拝み懸魚緒に酷似

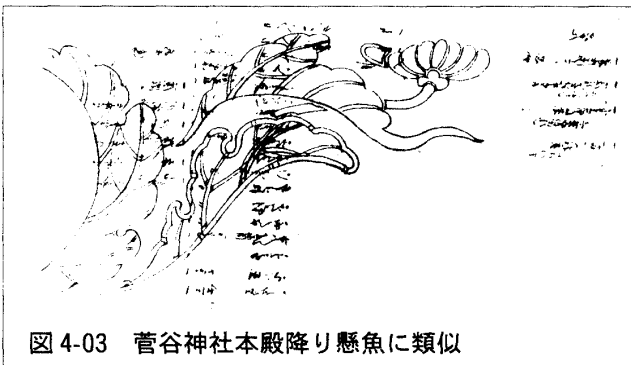


図 4-03 菅谷神社本殿降り懸魚に類似

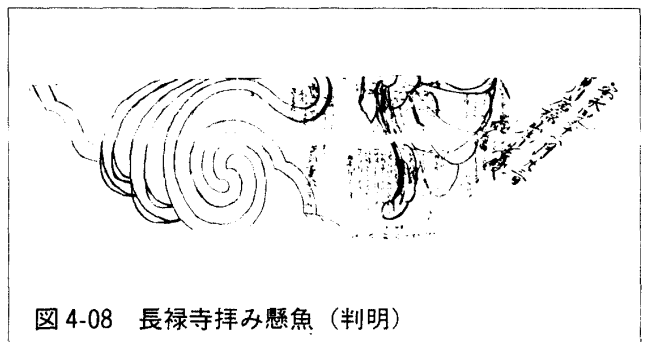


図 4-08 長祿寺拝み懸魚 (判明)

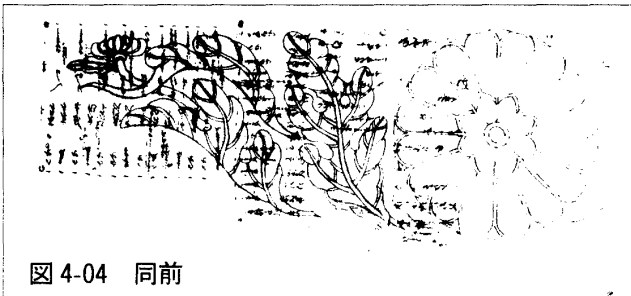


図 4-04 同前



図 4-09 同前

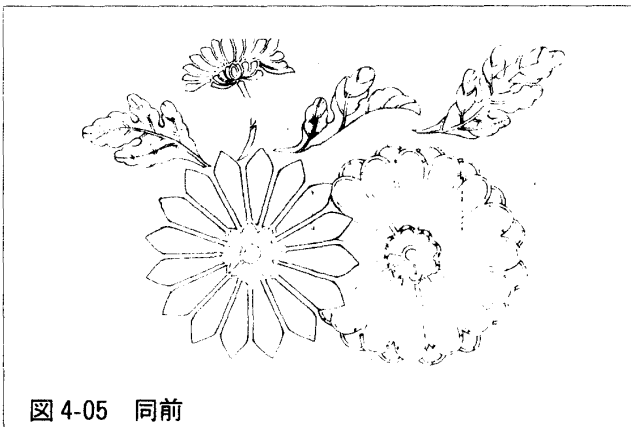


図 4-05 同前

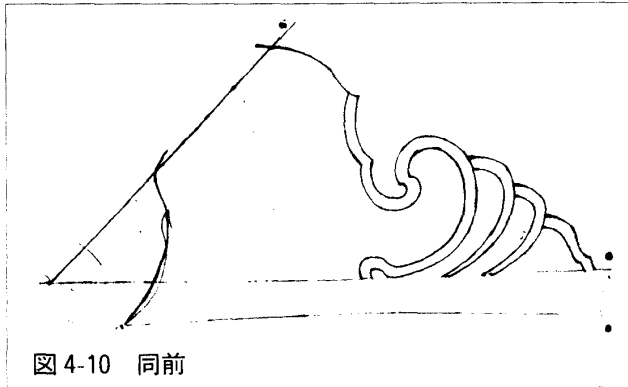


图 4-10 同前

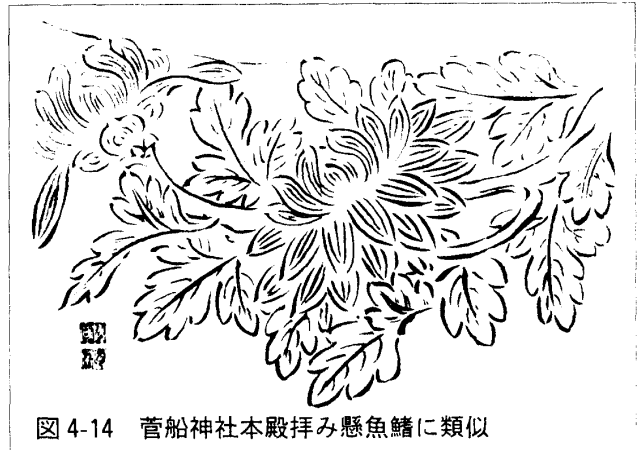


图 4-14 菅船神社本殿拝み懸魚鱗に類似



图 4-11 同前



图 4-15 同前



图 4-12 菅船神社本殿本殿拝み懸魚に類似



图 4-16 蛭沢稻荷神社本殿拝み懸魚 (判明)



图 4-13 菅船神社本殿拝み懸魚鱗に酷似

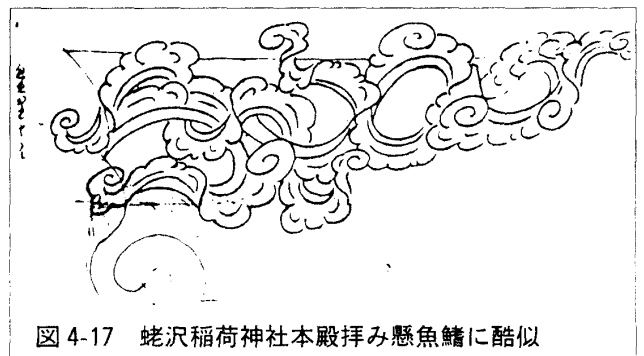


图 4-17 蛭沢稻荷神社本殿拝み懸魚鱗に酷似



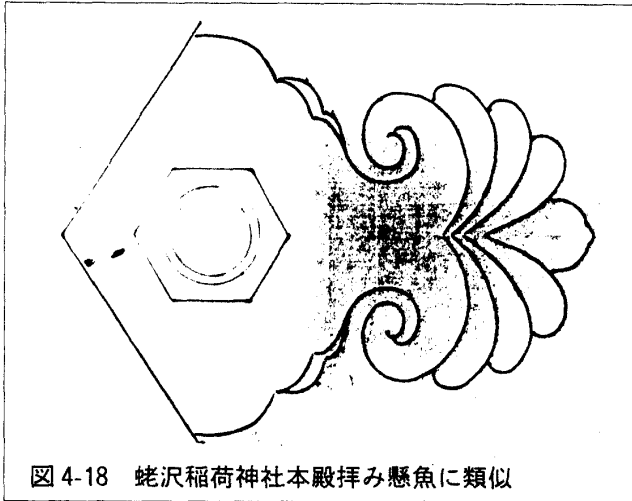


図 4-18 蛭沢稲荷神社本殿拝み懸魚に類似



図 4-22 龍穩院本堂唐破風拝み懸魚に酷似

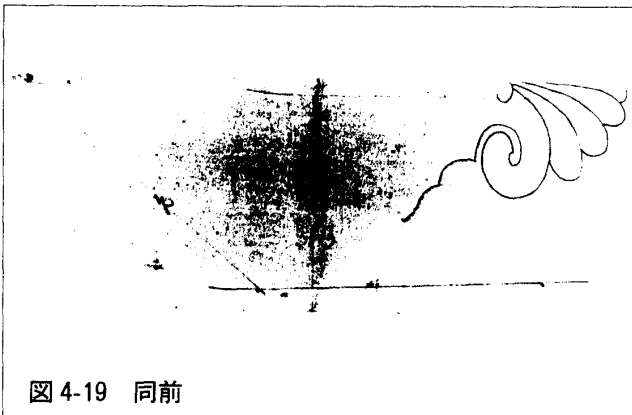


図 4-19 同前

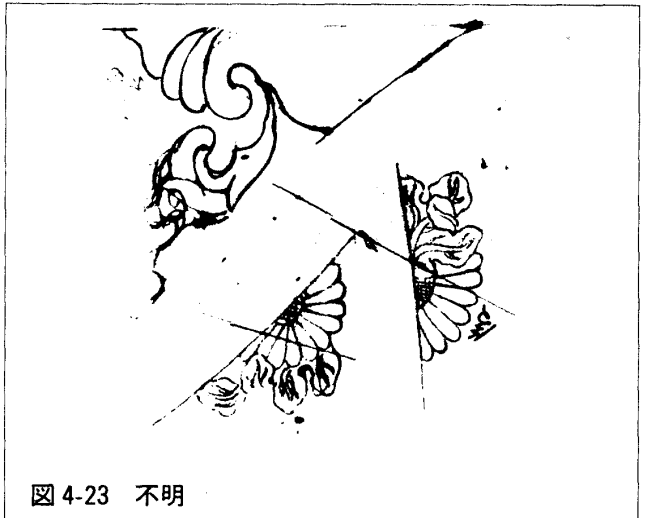


図 4-23 不明

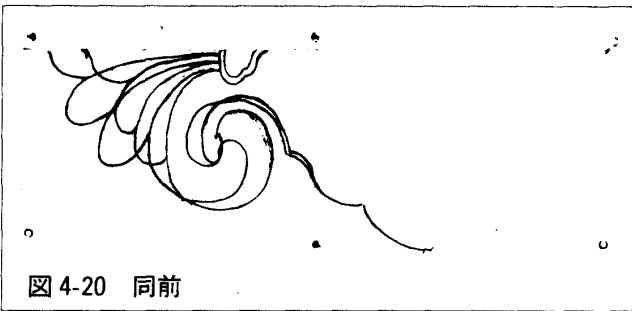


図 4-20 同前

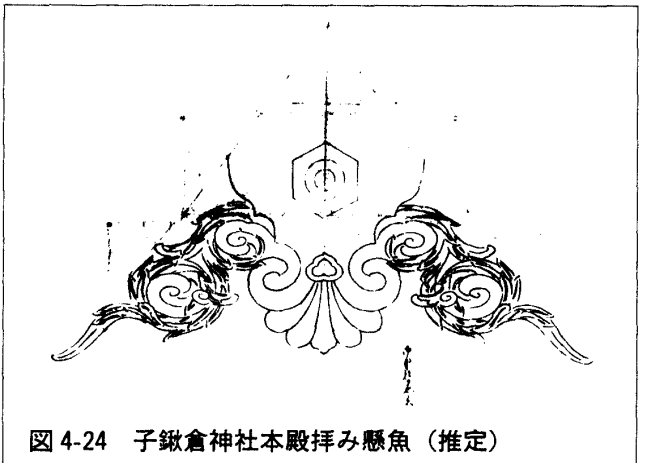


図 4-24 子鍛倉神社本殿拝み懸魚 (推定)

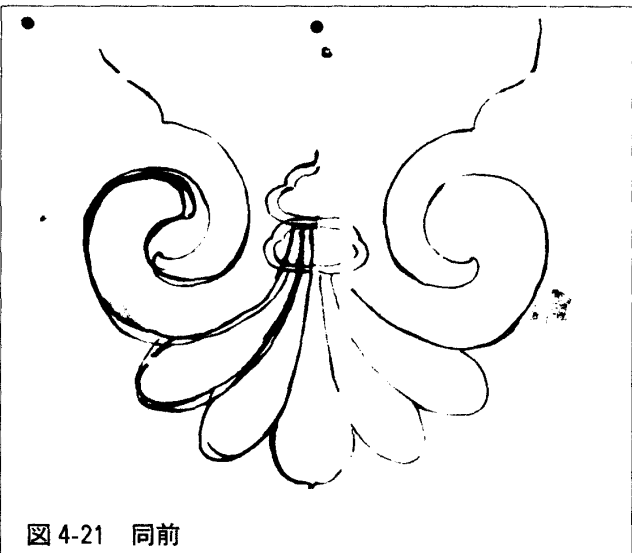


図 4-21 同前

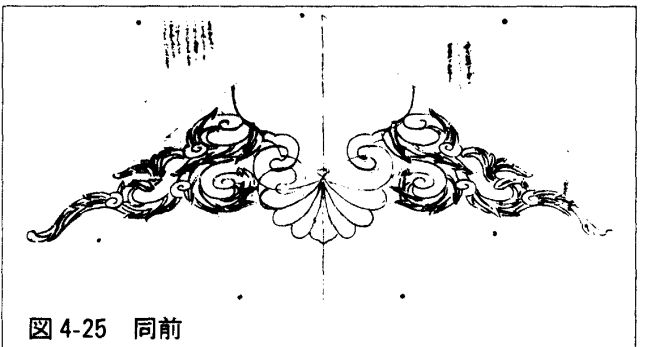


図 4-25 同前

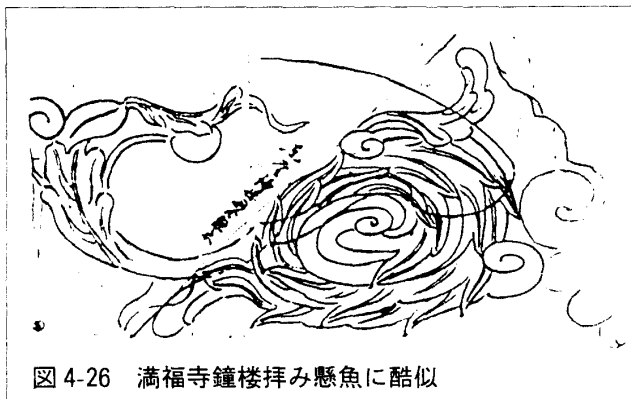


図 4-26 満福寺鐘楼拝み懸魚に酷似

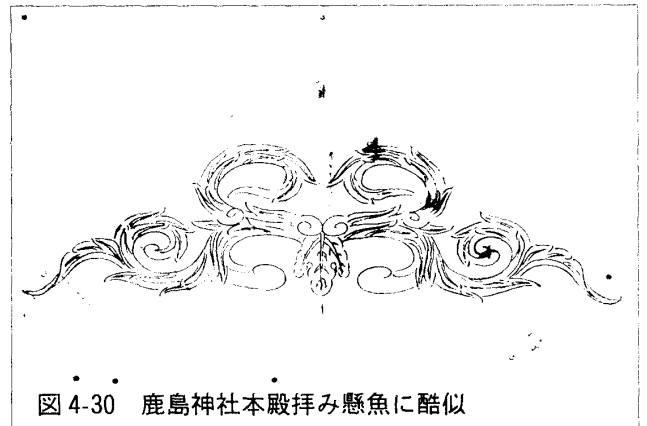


図 4-30 鹿島神社本殿拝み懸魚に酷似

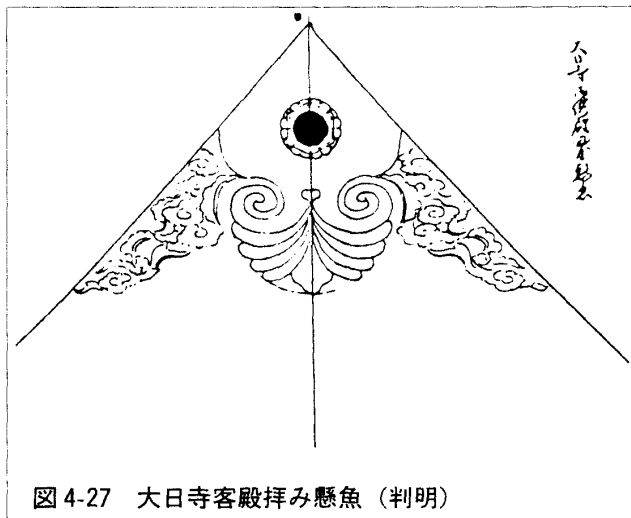


図 4-27 大日寺客殿拝み懸魚 (判明)

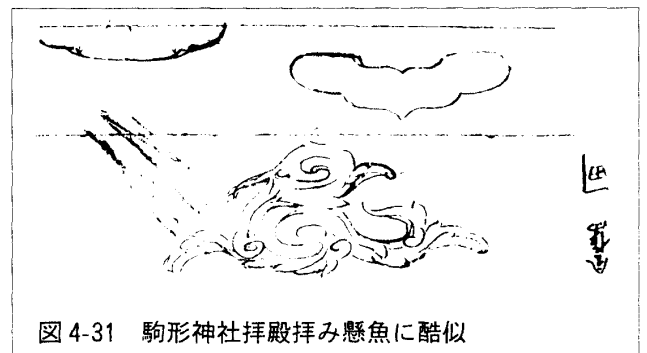


図 4-31 駒形神社拝殿拝み懸魚に酷似

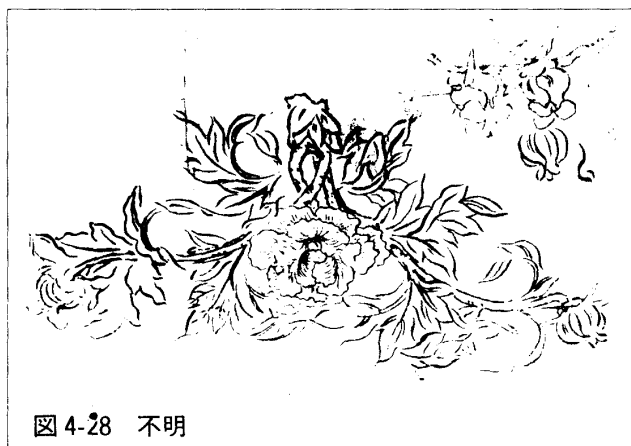


図 4-28 不明

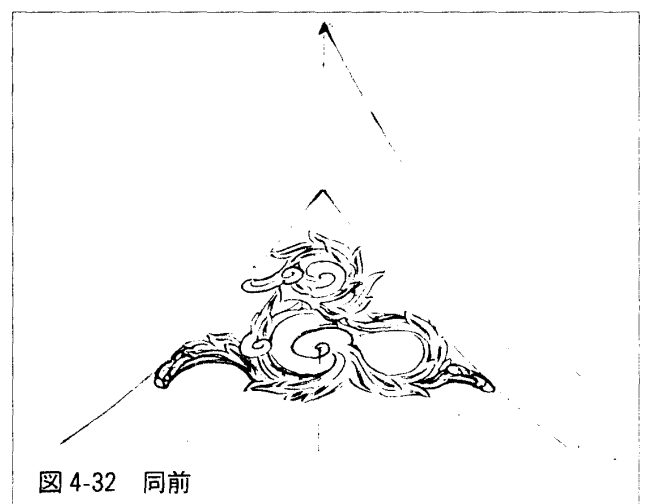


図 4-32 同前

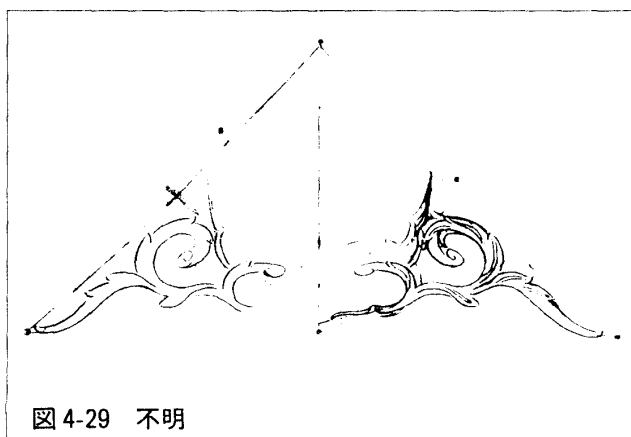


図 4-29 不明



図 4-33 剛叟寺本堂唐破風拝み懸魚に酷似

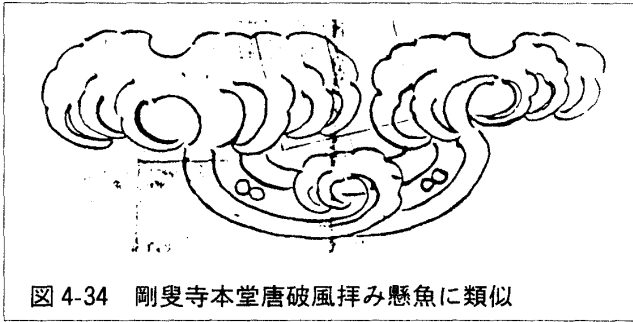


図 4-34 剛叟寺本堂唐破風拝み懸魚に類似



図 4-39 同前

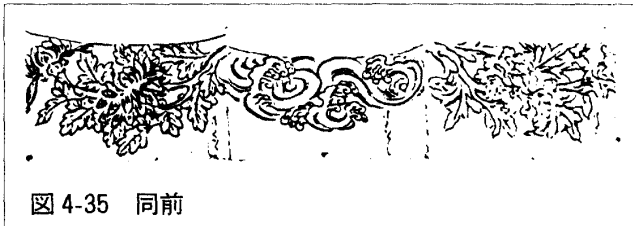


図 4-35 同前

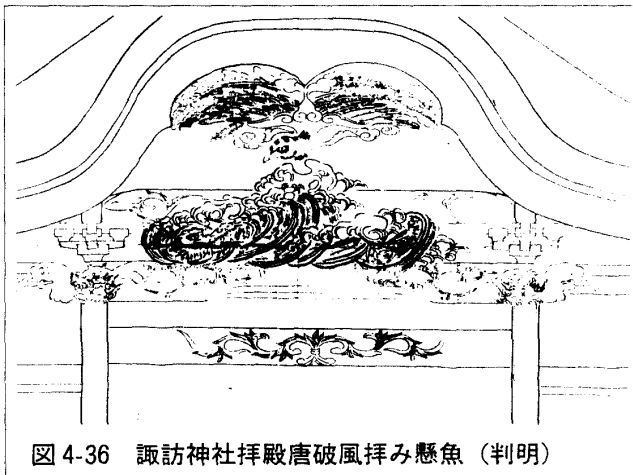


図 4-36 諏訪神社拝殿唐破風拝み懸魚 (判明)

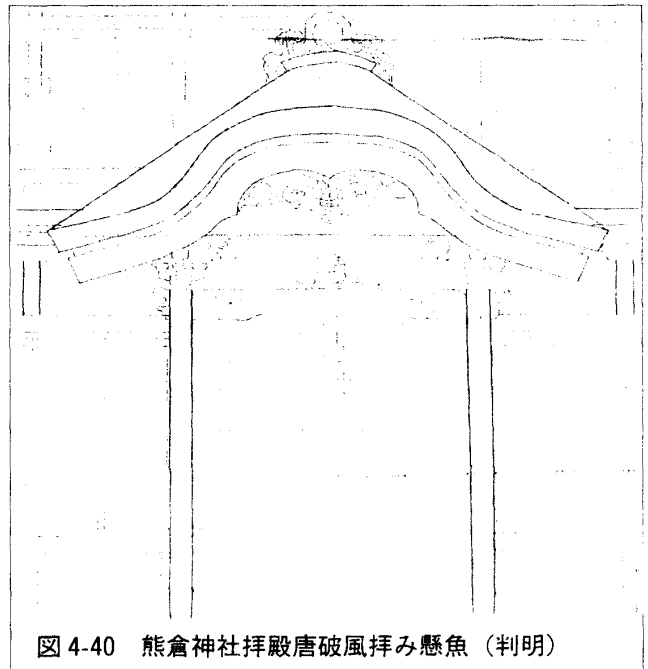


図 4-40 熊倉神社拝殿唐破風拝み懸魚 (判明)

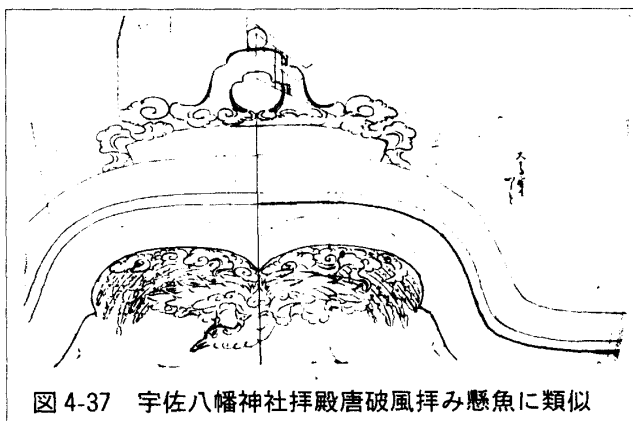


図 4-37 宇佐八幡神社拝殿唐破風拝み懸魚に類似

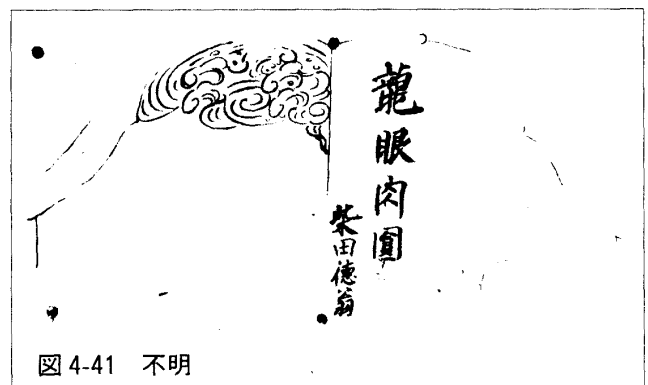


図 4-41 不明



図 4-38 宇佐八幡神社拝殿唐破風拝み懸魚に酷似

## 5 結論

これまでの考察を要約すると以下のような  
る。

- (1) 懸魚絵様を分類するには、懸魚が取り付けられる位置と懸魚の形態と意匠の主題（モチーフ）に分けて考える必要がある。
- (2) 懸魚単体型の意匠は『大匠雛形』においてほぼ出尽くし、その後多少新しい意匠が出てくる。中でも『雑工雛形』の意匠の斬新さは群を抜いている。
- (3) 唐破風拌み懸魚は『彫工雛形』以後、動物系、植物系、天象系の左右非対称形のもの  
が主流になる。
- (4) 鱗の意匠は『大匠雛形』においてほぼ出尽くし、その後あまり新奇なものはみられない。『当世いろは絵様集』以後の渦若葉鱗が新しいデザインとして特筆される。
- (5) 横田氏の拌み懸魚の本体は、満福寺鐘楼（1861）まで猪の目付蕪懸魚が用いられている。
- (6) 横田氏の鱗の意匠は、菅船神社本殿（1817）までは植物系のデザインが主流であり、それ以後、雲水や渦若葉などのデザインが現れた。
- (7) 横田氏の懸魚鱗一体型の懸魚は、駒形神社本殿（1882）が初出であり、明治期の拌み懸魚はすべて一体型である。
- (8) 横田氏の唐破風拌み懸魚は、龍穩院本堂（1831）の鳳凰・雲懸魚が初出であり、明治期には鳳凰・雲水・雲龍など多様で豪華

な意匠になった。

- (9) 横田氏の懸魚と近世木割書における懸魚を比較すると、龍穩院本堂向拌唐破風拌み懸魚を除けば、ほぼ30年遅れて木割書の流行を追っていることが窺われる。
- (10) 横田家大工文書における懸魚絵様41点は、横田氏の建築作品における懸魚と比較することによって、6点が図中に記された建物名によって判明し、15点が実物の懸魚に酷似し、14点が類似し、2点がどの建物に使用されたのか推定し、4点がどの建物に使用された懸魚か不明であった。

## 注

- 1) 拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の虹梁絵様について—横田家大工文書の研究(4)—」共栄学園短期大学研究紀要、第15号、1999年3月  
拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の木鼻絵様について—横田家大工文書の研究(5)—」共栄学園短期大学研究紀要、第16号、2000年3月  
拙稿「蜘蛛流大工棟梁横田氏の臺股・笈形絵様について—横田家大工文書の研究(6)—」共栄学園短期大学研究紀要、第17号、2001年3月
- 2) 「匠家絵様集」「大工絵様雑工雛形」の臺股・笈形絵様は麓和善編著『日本建築古典叢書第9巻』（大龍堂、1991年）から抜粋した。
- 3) 麓和善「木版本彫物書系絵様雛形の内容的特質」（『建築史学』第14号、1990年3月）PP.93-94
- 4) 拙稿「横田家大工文書の研究(1)」共栄学園短期大学研究紀要、第11号、1995年3月

## SYNOPSIS

Consideration on the Design Style of “Gegyo” made by the Yokota Family,  
the Master Builders of Kumo School

Dr. SHIRAI Hiroyasu

The paper offers an analysis of and a consideration on the design style on the architectural documents and works by the master builders of the Kumo School, chaired by the Yokota Family during the period from late Edo to early Meiji.

As a result of our reseach about the design style of “Gegyo”, we can point out the following findinngs:

1. To classify the design style of “Gegyo”, it must be thought of dividing into the position which “Gegyo” is installed in, the form of it and the motif of the design.
2. The various design of “Gegyo” which is the simple substance type expressed already at “Daisho Hinagata” which is an architectural document, and the design which is new little after that appears. In particular, as for novelty of the design of “Zakko Hinagata” which is an architectural document, it excels.
3. In “Gegyo” at the top of chinese gable, the design of an animal system, a plant system and a nature system which are asymmetry form became main stream after “Choko Hinagata” which is an architectural document.
4. The design of “Hire” like the fin fullies express approximately at “Daisho Hinagata” and after that, the novel one didn’t come out. After “Tosei Iroha Eyoushu” which is an architectural document, “Uzu-Wakaba” as the design of “Hire” is taken notice as the new design.
5. As for the design of “Gegyo” at the top of the gable made by Yokota, “Kabura-Gegyo” with “Inome” was used for continually before the belfty of Manpukuji Temple (1861).
6. As for the design of “Hire” made by Yokota, the design of the plant system was main stream to the main building of Sugafune Shrine (1817), and after it, the design of “Unsui (cloud and water)”, “Uzu-Wakaba (whirlpool designed by young leaf)” and so on appeared.
7. As for the design of “Hire” made by Yokota that has not distinction between “Gegyo” and “Hire”, it was the first coming-out in the main building of Komagata Shrine (1882) and “Gegyo” at the top of the gable in Meiji period were the integrated type.
8. As for the design of “Gegyo” at the top of the chinese gable made by Yotota, “Gegyo” of the chinese phoenix and cloud at the main hall of Ryuonin Temple was the first coming-out and in Meiji period, it became the various and luxurious design such as the chinese phoenix, the cloud and water, the cloud and dragon.
9. If excluding “Gegyo” at the top of the chinese gable of the main hall of Ryuonin Temple, when comparing “Gegyo” made by Yokota and “Gegyo” at the kiwari book in the modern time, it finds that Yokota’s design was delayed about 30 years and that it was pursuing the popularity of the kiwari book.
10. By comparing 41 pieces of the design of “Gegyo” at the architectural documents written by Yokota, with “Gegyo” in Yokota’s architectural works, the name of 6 pieces were proved by the building name which was written down in the figure. The design of 15 pieces resemble the real “Gegyo” closely and another 14 peices were similar to the real one. It was estimated that 2 pieces were used for which building. It was unclear that 4 pieces were used for which building.